

知的特別支援学校と小学校における交流及び共同学習の実践に関する調査研究 A Study of Exchange Activities and Collaborative Learning in a Special Needs Education School for Children with Intellectual Disabilities and a Mainstream School

ホール研究室 三浦 健

1. はじめに

◎研究の概要

交流及び共同学習とは幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校等が行う、障害のある子供と障害のない子供あるいは地域の障害のある人とが触れ合い、共に活動する学習ないし交流活動である。(文部科学省, 2019)

学校は障がいのある子どもと障がいのない子どもが関わり合える環境や場づくりを行う役割を担うことが出来る存在である。共生社会の実現に向けて、障害の有無にかかわらず子どもたちが共に尊重し合い、支え合っていく態度を育てていくためにも、学校がより一層交流及び共同学習を推進していくことが重要である。

本研究では、A市内のB知的特別支援学校とC小学校で行われた交流及び共同学習の実践について調査研究していく。交流及び共同学習の実践について質的研究を通して、子どもたちにとってよい学びとなる交流及び共同学習の形を考察していく。

2. 関連文献の調査と研究課題の設定

・山本、佐藤 (2008)

交流及び共同学習を行っていく際に「特別支援学級側と通常学級側で共有できる目的・ねらいを設定すること」「特別支援学級担任が積極的に通常学級に関わり、通常学級担任が無理なく支援方法を学べる機会を増やしていくこと」が重要であると述べている。⇒これらは学校間交流でも同様のことが言えると考えられる。

・独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 (2019)

全国全ての特別支援学校を対象に調査を行った『交流及び共同学習の推進に関する研究』によると、交流及び共同学習の課題や問題点等において「相手校の意識・理解について」という回答が最も多かった。相手校の意識や理解について課題が挙げられているということは、十分に連携が取れていないことや目的やねらいの共有が上手くいっていないことなどが考えられる。

◎研究課題

- ①交流及び共同学習(学校間交流)のねらいは何か
- ②交流及び共同学習における事前・最中・事後の指導や支援について
- ③交流及び共同学習の在り方や成果、課題点
- ④今後の交流及び共同学習に向けて、両校の先生が期待していることは何か

3. 研究方法

➤ インタビュー

対象:本年度交流及び共同学習を行ったA市内にあるB知的特別支援学校の教諭7名とC小学校の教諭1名の計8名を対象にインタビューを実施した。

4. 研究・調査結果

【経験の拡大】

- ・両校の児童たちにとってまずは友達と一緒に活動する経験を増やすこと
- ・大きく捉えたとしたら社会経験を広げるというスタンス
- ・(B 知的特別支援学校の児童にとって)生活経験の拡大
- ・(B 知的特別支援学校の児童、C 小学校の児童)お互いの生活経験を拡大すること

【気持ち】

- ・特に意識せずに一緒に生活していくという気持ちを育てること
- ・(C 小学校の児童が B 知的特別支援学校の児童と)どんな形でもいいので仲良くして欲しい
- ・集団の中で一緒に楽しく活動することができること

【相互理解】

- ・小学生という観点からすれば、お互いのことを知ること
- ・お互いの違いを一緒に活動を通して子どもたち同士で気付くこと

表1 交流及び共同学習のねらい(特に重要視していること)

5. 考察

【経験の拡大】

B 知的特別支援学校の児童にとっては小学部の児童が少ないことから同世代の友達と関わる機会が少ないことから、他者とりわけ友達と一緒に活動する経験を増やしたいというねらいがあった。C 小学校の児童にとっては、障害のある人と関わったり他校の友達と一緒に活動したりすることを通して生活経験を拡大するというねらいがあった。C 小学校の児童にとって生活経験の拡大をねらいにした背景には C 小学校には特別支援学級がないことが挙げられた。

【気持ち】

交流及び共同学習において、交流の側面に着目した時、仲良く、楽しく活動してほしいという教師の願いがあることが分かった。障害の有無にかかわらず共に活動や学習をする友達同士として関わり合っていく気持ちを育成していくことが共生社会の実現に向けたねらいの1つであると考えた。

【相互理解】

まずはお互いのことを知ることが交流及び共同学習のねらいの1つとして挙げられた。両校の児童にとって関わりがなければ相手校はどんなところなのか、どんな子どもたちが通っているかなど分からないことがほとんどである。交流及び共同学習を通して一緒に活動し、お互いのことを知っていくことにより相互理解の促進に繋がっていくと考えられる。これは経験の拡大に繋がるとも言える。

6. これからの研究の展望

- ・残りの研究課題に対する内容を整理・分析をしていく。
- ・これまでにまとめてきた内容について吟味・修正を重ねていく。

7. 参考文献

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所「交流及び共同学習に関する調査研究」, 2019 年
文部科学省「交流及び共同学習ガイド」, 2019 年
山本亜紀子 佐藤慎二「特別支援学級に在籍する児童・生徒の交流及び共同学習に関する調査：特別支援学級担任と通常学級担任を対象として」, 2008 年